

信仰の土着化と ナショナリズムの 相関関係

Overview

- ナショナリズムと宗教
- 近代化と信仰の「土着化」
- まとめ
- 応用事例——「風の谷のナウシカ」

ナショナリズムと宗教

- 近代化の産物としてのナショナリズム（→ウェストファリア体制）
 - cf. 近代以前：日蓮『立正安国論』、国学、復古神道
- 「国民は想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、**共同の聖餐（コミュニオン）**のイメージが生きているからである」（B.アンダーソン『想像の共同体』）。

- 背景：宗教改革（1517）
三十年戦争（1618-48）



- ウェストファリア条約（1648）
 - 史上初の多国間条約。現在の国際秩序の起源。
 - 主権国家の領土権と主権国家による相互内政不干渉の原則。
- アウグスブルクの和議（1555）を徹底。「領主が領土内の宗教を決定する」（*cujus regio, ejus religio*）
- 主権国家は領民の忠誠心を宗教から国家へと移行させる必要があった。

- ウェストファリア体制がもたらしたもの
 - 宗教は**公的な領域**から**私的な領域**へと移行。
 - 主権国家は領土内の暴力手段（軍隊・警察など）を独占。
- 現代のテロはウェストファリア体制が前提とする「制度化された暴力」への暴力的挑戦となっている。

ナショナリズムに対する神学的洞察

- 「プロテスタント原理は、（中略）相対的な現実に対してなされる、いかなる絶対的な主張にも——それがたとえプロテスタント教会によってなされたとしても——抵抗する神聖かつ人間的なプロテストを含意している」（P.Tillich, *The Protestant Era*）。
- 偶像崇拜の禁止（→**見えざる偶像崇拜**）

世俗的ナショナリズムと宗教

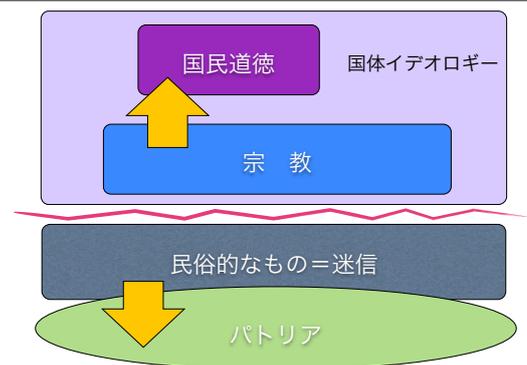
「〔世俗的ナショナリズムと宗教は〕包括的な道徳秩序の枠組み、すなわちそれに所属する人々に**究極的な忠誠を命じる枠組み**を与えるという、倫理的な機能を果たす。（中略）ナショナリズムと宗教がもつ、**殉教と暴力に道徳的許可を与える力**ほどに、明確に忠誠の共通様式が現れているものは、他のどこにも存在しない」（M.ユルゲンスマイヤー 『ナショナリズムの世俗性と宗教性』）。

近代化と信仰の「土着化」

- 土着化（indigenization）とは？
- すべての外来宗教は、ホスト社会で土着化の課題に直面してきた。
- テキストとコンテキスト（文脈）の関係
- 近代における土着化は、しばしばナショナリズムと結びついた。
- 日本仏教のような伝統宗教でさえ、「ナショナルなもの」への**《再土着化》**を求められた。

まとめ

- 近代における土着化とナショナリズム
- 人々が生きる生活の場としてのパトリア（郷土）に張っていた《具体的な》根を切断し、「想像の共同体」としての国家に対し、新たに《抽象的な》根を張り直すプロセス（→近代日本の「宗教」概念）



- ナショナリズムに対し批判的距離を取りながら、多様な宗教性を考慮するために
- ナショナリズムや宗教概念に負わされていた超文脈的（trans-contextual）特性を相対化
- 「国家」を超える、人類としての「普遍性」の追求

応用事例——「風の谷のナウシカ」





「ナウシカ」に見る比較文化

- キリスト教の終末論（黙示文学）やメシアニズムを日本文化に「土着化」
- 共通点：自己犠牲（死そして復活）
- 相違点：
 - 救世主（メシア）：男性ではなく女性。自然の「支配者」ではなく、自然の「友」。
 - 善悪の報いではなく、善悪の彼岸へ。



オウムの群れの上を歩くナウシカとテト

ミケランジェロ「最後の審判」（システィーナ礼拝堂）